

## 「研究空間スユ+ノモ」の挑戦@韓国・ソウル

西山 雄二

おたがいへの贈りものとなること！ 研究空間スユ+ノモは  
よい知とよい生を一致させる 研究者たちの自由な生活共同体です。

——「スユ+ノモ」入口に掲げられた宣言文

### 「研究空間スユ+ノモ Research Machine “Suyu+Trans”」という場

1997年、ソウル郊外のスユリに国文学研究者・高美淑（コ・ミスク）が勉強部屋を開設後に、社会科学研究所を中心とする若手研究者たちが合流して、現在の「研究空間スユ+ノモ」が創設。

朝鮮近代の啓蒙思想、韓国の近代性を文学から探究するグループ  
+近代資本主義を批判的に問うグループ

博士号を取得したものの就職先がない「高学歴ワーキングプア」たちが創設した、大衆に開かれた研究教育のための自律的な生活共同体。

理論探究がなされる研究所であり、数々の教育活動が実施される施設であるだけでなく、研究員の共同生活が重視されるコミュニオン。

研究と生活に関して参加者が共に悩むための場。

前提：自分たちの好きな研究を一生続けられるための場所を自分たちの手で作ること

「ある友人は、私がすごい運動を繰り広げているものだと持ち上げる。何を知って言っているのか。これは何かの信念によっておこなう運動ではない。世の中の人々すべてがそうであるように、私もまたどうにかして生きていく工夫を探しているだけだ。職を得ることができない他の博士のように、学期中に非常勤講師をいくつも掛け持ちし、いわゆる「シーズン」には予備校で働き、ある程度を受け取ることはできるだろうが、そうせずに生きる道を見つけ出してみようということだ。」（『歩きながら問う』、123頁）

97年、スユリ：約20坪

→2005年、鍾路（チョンノ）：三階建てのビル（160坪）を貸し切り

→2006年、龍山（ヨンサン）：（300坪）

→2006年末～現在、南山（ナムサン）：ビル4階を一フロア（400坪）貸し切り

三つの大きな講義室（兼ヨガ室および卓球室）、三つのセミナー室、カフェ、厨房+食堂、

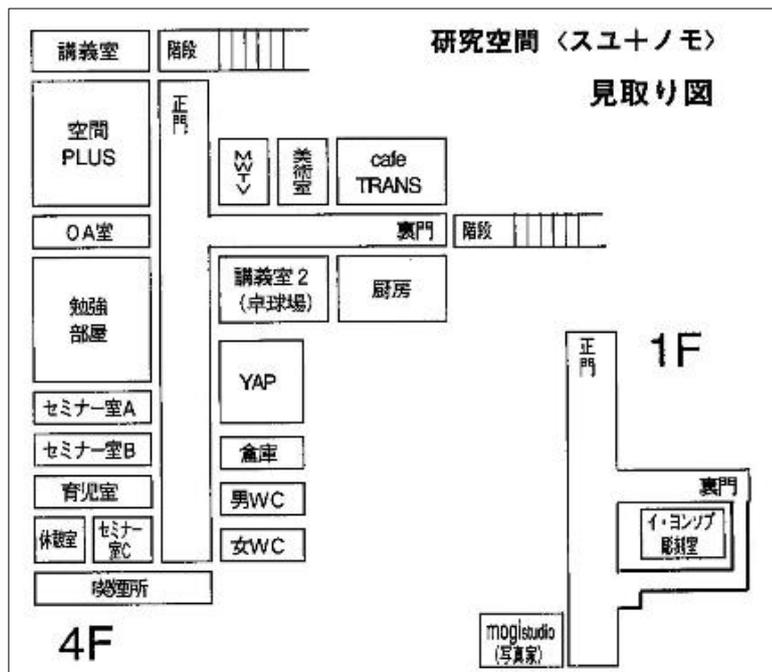
勉強部屋、美術室、育児室、映像編集室、仮眠室など。

近所にゲストハウス「南山斎」：  
家賃1ヶ月10万ウォン（1万円）。遠方の参加者や外国からの客人優先。

### 共に食べること

食堂では当番制で食事が準備・調理。  
食堂とカフェでは会計箱に自分でお金を入れ、自分で食材を盛り、飲み物を注ぎ、自分の試用した食器類を自分で洗う。

昼夜の二食が1食約180円で提供され、毎回約30名が食事を共にする。  
食べ残しは厳禁。食後はパンの切れ端で食器に残るソースまできれいに磨いて残さずに食べ切る。  
講義やセミナーの際にはつねにお茶とおやつが準備される。余った分はカフェに納品。



## 研究教育プログラム

### 通常セミナー（約30種類）

少人数の研究会で（最低2名から開催）、朝昼夜の三種類の時間帯で毎週一コマ3時間実施。  
授業料は毎月1,500円（約30種類のセミナーすべてに参加可能）  
参加者数は各学期のべ100名ほど。

### 一般公開事業「空間 PLUS」

「講学院」

東洋思想に関する「古典講義」、西洋思想に関する「理論講義」、今日的なテーマを扱う「主題別講義」からなる。週1回の開催で準備時間2時間、本講義3時間の長丁場。受講料は一講義一学期につき約3万円。2008年秋学期はそれぞれ、「出来事の思考——ドゥルーズ『意味の論理学』とインドの中論思想」「スピノザ読解」「魯迅の剣と微笑」。

### 通年講義「大衆知性」

年間40週、週3コマ。受講料は年間15万円。

一年間で精神分析、自然科学、文学、道徳などさまざまな講義を受講。

≠大学の一般教養課程：

習得すべき一般教養という知の全体性があらかじめ設定されず、各講師が自分のもっとも関心があることを講義し、受講生の生き方を変革する刺激のある講義を提供することが唯一の理念と責務とされる。

火公騒・火工所（毎週火曜に開催される会員による全体会議）

### 経済的な問題

ビルの一フロアの家賃毎月 120 万円。政府や企業からの資金提供を一切受けていない。

約 60 名の運営会員が自分の収入に応じて自由に運営基金を支払う（全収入の約 25%）。

ひとり毎月 4 千円から最高額が 2 万円まで。

→過度の資金提供をする特定の人物にある種の貴族的特権が付与され、研究空間の民主的  
共同性が乱される恐れがあるため、上限も設定。

セミナーと講義の受講料、ヨガ教室や美術教室の参加料、不登校児向けの教室、出版物などによる収入も。

廊下の掲示板には毎月の詳細な収支報告を掲示。資金の流れがきちんと公開され、参加者  
がお金の有効な使い方を強く意識することが重要。

「不思議なことに、お金が問題になったことは一度もなかった。それどころかお金の問題は規模が大きくなるほど、より簡単に解けた。別の言い方をすれば、共同体生活においてはお金よりもっと難しく大変な敷居が多いということだ。正直言って、お金に対する欲を捨てるのは容易い。それでは、自分の能力と個性、才能と気質はどうだろうか？ 捨てることができるか？ 決して容易くはない。それを捨てねばならないという事実さえ納得することは簡単ではない。しかし、その境界まで進むべきだ。いや、コミュニケーションの活動密度が高まるほど、すぐさまそのような問題に正面からぶつかるようになる。」（141 頁）

### 贈与と接続

commune=com（共に）+munis（贈り物）

「お互いへの贈りものとなること」

- ・椅子や机、子供の玩具などの寄付。
- ・農村コミュニケーションとの連携：市場では割に合わない価格で取引される農作物の寄付を受け、そのお返しに農村の人々を講義に無料で招待。

「研究空間スユ+ノモ」=Research Machine ドゥルーズ+ガタリの「機械」

ある空間はつねに他の空間と接続されるはずであり、また、ある物理的な空間それ自体はその都度の活動に応じて変容。研究教育がその空間の接続と変容に曝され、知がその都度さまざまな宛先へと差し向けられる。

## 大学と社会、制度圏（大学）の内部と外部

「ところで興味深いのは、インタビューを受ける度にいつも制度圏侵入を拒否するということが主要な 이슈として扱われるという点だ。はっきり言えば、これは、実際には些細なことに過ぎない。私と私の友人たちは、制度圏なのか否かという事柄にまったくもって関心がない。私たちの目標は、教育と研究をひとつに融合させながら、人為的に境界づけられた障壁を越え、知的エネルギーを流れ溢れださせることにあるのみだ。ただ、制度圏への進入が現実的には到底不可能であるがゆえに、とりあえずその外部で始めてみたのみである。ところが、問題を制度圏の内部か外部かといったところに設定した瞬間、このような意図とは無関係にまた別の二分法の落とし穴に陥ることになる。」（『歩きながら問う』、59 頁）

## 研究教育と現場性

直接足を運んで活動することで、知の現場を生み出すことを重視

### ・2006 年、「大長征」

約 2 週間、全羅道<sup>チョルチド</sup>からソウルまで歩き、地域住民たちと交流し、各地で小さな学習会を開催。→当時社会問題となっていた国策事業（新萬金<sup>セマングム</sup>の干拓事業、平澤<sup>ピョンテク</sup>の米軍基地建設）、韓米の FTA（自由貿易協定）締結に反対の意志を表明し、地域住民たちと議論を重ねること

### ・講義「平和人文学」@刑務所

更生プログラムにおいては、キリスト教の宣教活動が大部分を占めており、宗教的な改心と救済という色合いが強い。→在監者が自ら思考し判断する権利の回復

### ・2008 年 6 月、「路上の人文学」

狂牛病の恐れのある米国産牛肉の輸入再開反対に端を発する大規模なデモの現場でのスピーチ。

### 〈参考文献〉

金友子編訳『歩きながら問う—研究空間〈スユ+ノモ〉の実践』、インパクト出版会、2008 年。